

# 環 (あい)

光耀抄 .....	2
琥珀集 .....	6
瑠璃集 .....	16
瑪瑙集 .....	26
紅玉集 .....	29
3月号月評 .....	30
恵贈句集拝見 (84) .....	32
恵贈俳誌拝見 (49) .....	34
特別作品「東京散歩」 .....	36
琥珀集作品鑑賞 .....	38
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ .....	39
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ .....	40
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 .....	41
別冊100号会員自選句鑑賞 (5) .....	44
他誌転載 .....	46
東山句会「落柿舎吟行」 .....	48
琵琶湖俳句サロン .....	50
俳誌交歓 .....	51
イザナミの言語学 (15) .....	52
今城塚吟行記 .....	54
エッセイ「初心」 .....	56

今月の一句

木々の芽の窓の明りのよき湯かな 桂樟蹊子

(平成二年作)

昭和五十三年四月より、本願寺の大乗俳壇の選をされていた。また昭和六十一年一月からは、俳壇の一隅に「白祥庵記」として随想も添えられるようになった中の一句である。随想には、当時電化されない時代であり知らない人も多かった風呂の温度は四十二・三度、酒の爛・番茶の出鼻もコーヒーも、紅茶も五十四・五度がよいと書かれている。さてこの句の「よき湯」は四十二度、四十三度どちらであったのだろうか。珍しく「の」の字が四つも入った句に挑戦されている。

隆子

# 寒椿

一峰を父と仰げり初景色

山門へ新春を祝ぐ馬酔木道

低き門をくぐる初東風九体堂

雪明り池の返照抱く阿弥陀

厨子内に溢るる淑気開扉仏

人形の服など縫うて三日かな

寒梅や嬰を生せる子の神々し

塩路隆子

# 三月号光耀抄

歳の瀬や京の真中の六角堂  
伊勢海老の融通きかぬ飾付け  
縹渺と近江雪原月照らす  
皿そばや出石の街の雪も止む  
棒鱈を好きなれば煮てふたり住  
炉火赤き山の民宿またぎ飯  
枯葉かと思紛ふばかり雀群れ  
証文を賭くる佐世保の喧嘩独楽  
初山河見慣るる糊の青さかな  
緋の雲を冠りて雪の東山  
おもちや屋は子らの楽園十二月  
大歳の合掌村や遊子われ  
空裂くるかに激しかり雨霰  
河豚食うて毒舌いよよ極まれり  
七度目の吾が干支迎へ屠蘇を酌む  
少年の瞳まつすぐ賀詞申す  
水鳥の群るる水際や陽のたまり  
命運は天意に委ね実千両  
柚子姫のでこぼこ浮かぶ湯のぬくき

塩路 隆子選

田中 浅子  
北尾 章郎  
笹井 康夫  
難波 篤直  
佐用 圭子  
鈴木 照子  
桂 敦子  
山口キミコ  
竹内 悦子  
谷口 俊郎  
三川美代子  
坂上 香菜  
坂根 宏子  
阪本 哲弘  
塩路 五郎  
片岡久美子  
中川すみ子  
中本 吉信  
中井 弘一

初詣神酒を重ねてしどろ足  
藁まみれ村は総出の注連作り  
善哉の雑煮に慣れて五十年  
落慶に賜はる法話冬ぬくし  
春待つや大型くまの縫ひぐるみ  
銀世界の入江に集ふかいつぶり  
夜廻りにLEDの眩しかり  
牡蠣啜る人の横にて酒を酌む  
河豚酒の舌に重たき甘さかな  
神鈴の音絶え間なし初天神  
しらじらと月を東の初御空  
上賀茂の生活うかがふ酢茎漬  
三日過ぎわたしの時間とり戻す  
初詣ふるまひ酒の木の匂ひ  
白砂に杳音高く初蹴鞠  
年の酒酌むはらからの髪白く  
田作のほど良き苦さ妻の味  
いく百の念ひ天まで大とんど  
直会の神酒の旨しや歳旦祭  
着ぶくれて一会の縁笑ひ講

中村ふく子  
能勢 栄子  
橋本 靖子  
秦 和子  
藤本 秀機  
増田 一代  
宮田 香  
森下 康子  
森田 利和  
山田 愛子  
山本 丈夫  
飯田美千子  
井口 淳子  
石川かおり  
伊藤 和子  
伊東 和子  
笠井 清佑  
川崎 利子  
木戸 宏子  
国包 澄子

形無きものへの祈り初詣  
 寒卵一貫目の子産みし朝  
 童顔のかく美しき焚火かな  
 息荒きラガのオーラ人寄せず  
 好きな札目の前に置き子の歌留多  
 新春の雲たなびけり比叡愛宕  
 元朝やまさらな顔の始動せる  
 手に残る赤子の重み松の内  
 北風が荒ぶばかりや高架駅  
 櫟の紅初うひしめでたかり  
 そぼ濡るる天の磐戸にしぐれ来て  
 笹鳴や爪先立ちて破璃戸拭く  
 寒月のつかず離れず一輛車  
 葉牡丹の日に溶けるごと解れゆく  
 雨上り力を得たる枯木立  
 書初は世界遺産の石州紙  
 掻き揚げの加賀蓮根や能登自慢  
 慎重に踏出せる歩々雪の原  
 神殿の簷よりあまた雪落とす  
 ゐこぼれて庭に莫塵しき日向ぼこ

小西 和子  
 西郷 慶子  
 安西 伸隆  
 黒住 康晴  
 吉田 宏之  
 高谷 栄一  
 大島 みよし  
 中井 登喜子  
 西田 史郎  
 西村 敏子  
 小林 久子  
 杉本 綾  
 松岡 和子  
 藤見 佳楠子  
 平井 紀夫  
 福本 すみ子  
 松田 和子  
 松田 洋子  
 宮越 久子  
 宮崎 左智子

一条の日矢に希望や初茜  
 霏々と降る雪を眺めて日の暮るる  
 欲捨つる冬至の空を仰ぎつつ  
 老僧の渡す引導雪しまく  
 御降りに金の鳳凰神々し  
 御降りをあまねく受けて里帰り  
 純潔のポインセチアに窓辺の陽  
 一卷の家譜記し終へぬ去年今年  
 冬日背にクロスワードを埋めゆく  
 初詣白さ眩しき地球かな  
 初詣神振り向かす五百円  
 たちまちに霰たばしる夕一刻  
 離れて一本仕上げ牛蒡注連  
 初春や賢者貌して親ひつじ  
 雀らの足跡を消すささめ雪  
 名前負け季節はづれの節料理  
 初鏡背すぢ伸ばして喜寿映す  
 一つの世も恋のあはれを初稽古  
 餅手毬金地の帯に彩足して  
 七宝の羊を買ふも年用意

山崎 里美  
 山下 潤子  
 山本 孝夫  
 横田 矩子  
 栗倉 昌子  
 伊藤 純子  
 伊藤 憲子  
 稲田 和子  
 伊庭 玲子  
 岩梶 隆子  
 大堀 賢二  
 大松 一枝  
 落合 晃  
 大越 義雄  
 佐々木 和子  
 鷺見 たえ子  
 高塚 千代子  
 辻 香秀  
 辻 知代子  
 十時 和子

# 琥珀集

淑氣満つ

北尾 章郎

冬暖き夫婦米寿の宴かな  
伊勢海老の融通きかぬ飾付け  
弧を描きゆるり八十路の弓始  
面々の変らぬ句柄初句会  
分の厚き束や賀状の届きたる  
淑氣満つ妻の流儀の床の松  
路地裏の甲高き声喧嘩独楽

寒四郎

笹井 康夫

木枯や幟はりつく竿の揺れ  
吾が影ののつぽになれる冬至過ぎ  
オーボエのソコの音色や聖夜来る  
歳の瀬や京の真中の六角堂  
年の市金箔入りの金平糖  
朱の鳥居潜るや淑と初御空  
香焚きて客を待つ部屋初明り

近江路の白装束や寒四郎  
縹渺と近江雪原月照らす  
芹なずな五臓六腑を癒やさるる  
湖静か比良の暮雪の神々し  
山並を分けて日の出の初景色  
冬空をとんび輪を描くひと日かな  
焼藪や遠き昭和の面影も



雪達磨

吹きつける粉雪浴びて露天風呂  
皿そばや出石の街の雪も止む  
年賀状書き終へ手指労りぬ  
医通ひを済ませて安堵年の暮  
初詣神社の犬に迎へられ  
マンシヨンの庭に小さき雪達磨  
雪激し温泉街の人まばら

難波 篤直

妖怪のせい

鈴木照子

冬椿無住寺を守る湖北びと  
越前蟹の食み出す椀や岬宿  
炉火赤き山の民宿またぎ飯  
子の集ふ押入れ好きで歌留多好き  
迷ひなくサンタはゐると信じる子  
妖怪のせいとインフルエンザの子  
聞き逃すほどの台詞や聖夜劇

初天神

佐用 圭子

漱石忌

桂 敦子

時雨るれば星図となれり硝子窓  
棒鱈を好きなれば煮てふたり住  
ぼこぼこことボールに浮かぶ小蕪かな  
うどん啜る落語や湯気を立つる暮  
小耳木菟こみみづく見たさの大き輪に入る  
黄金の小判よく売れ初天神  
吾にまた白紙の心初山河

漱石忌読み返したる「三四郎」  
枯葉かと思紛ふばかり雀群れ  
年の瀬や「税」ひと文字で総括し  
冬空へ試し撞きせる鐘響き  
検診日先づ記したる初暦  
足跡も音もかき消し雪深々  
徐行車のライト点々吹雪く街

冬 茜

山口キミコ

年始め

谷口 俊郎

顔見世に飛び交ふ屋号山場かな  
 大見得の役者の衣装着膨れて  
 ふるさとに向かふ車窓へ冬日射  
 長旅の列車終点冬茜  
 元日や浄めの白の銀世界  
 証文を賭くる佐世保の喧嘩独楽  
 書初にせむと句作り四苦八苦

初山河

竹内 悦子

四温の日

三川美代子

氷柱燦と朝日受けたる町家筋  
 初山河見慣るる湖の青さかな  
 元旦の雪に洗心神の前  
 七種の七つ確め昼の卓  
 除夜詣ふたりで巡る街の闇  
 ままごとに若菜を入れてママの役  
 大福茶夢語り合ふ若夫婦

このぶんでは積るかもねと元旦  
 元旦の暮を早めてしまく雪  
 また一葉今年最後との賀状  
 緋の雲を冠りて雪の東山  
 雑煮椀ふる里風にいたすべし  
 来し方を省みてをり初寝覚  
 どつすーん肚に響きて屋根の雪

けん玉の技の特訓四温晴  
 冬晴やミシガンゆると湖めぐり  
 おもちゃ屋は子らの楽園十二月  
 箱根駅伝やつと復路に繋げける  
 冬さるる石段多き古刹かな  
 公園はおとぎの世界雪明り  
 さつと来て雪をけちらす鴨の群

年新た

大歳の合掌村や遊子われ  
華語の飛ぶ白川郷や雪世界  
胴切りて紅芯大根鮮やかに  
初旅やホテルで箸の洋ランチ  
イケメンの火の番人や初詣  
花頭窓の明りに尊者年新た  
羊日の大和への旅晴渡る

坂上 香菜

大仏へ人を分けゆく冬の鹿  
天覆ふ阿蘇の噴煙冬早  
蒲団干し子の来しことを言はれけり  
語り部の黙おそろしや虎落笛  
河豚食うて毒舌いよよ極まれり  
短日や選句のそばに置時計  
ロケ終ふる高倉健や冬の海 (追憶)

虎落笛

阪本 哲弘

尺の雪

空裂くるかに激しかり雨霰  
嵐去り今朝の静けさ尺の雪  
初電話術後の声の元気かな  
万象の凍つる里山鳥語無く (三田句)  
寒晴や鬼広場ある有馬富士  
参詣の人を呑み込む雪の杜  
川べりに並ぶかまくら雪達磨

坂根 宏子

初詣

塩路 五郎

七度目の吾が干支迎へ屠蘇を酌む  
庭に来て飛び交ふ鳥や初景色  
啄める鳥の影濃し白障子  
御手洗の水やはらかや初詣  
裸木に耳あてて聴く鼓動かな  
寒雷に髪逆立つる伐折羅神  
地下街を出て仄に歩を合はず

# 瑠璃集

焚火

童顔のかく美しき焚火かな  
わが胸裡揺すられしまま焚火果つ  
砂山のごときが三つ焚火跡  
熱爛や上司はなほも無言にて  
熱爛やゆるりと訪へるわが老後

安西 信隆

春着の子

どの窓も開けて拝する初日の出  
形なき物への祈り初詣  
大吉の一番嬉し初東風に  
春着の子笑顔のままに寝入たる  
旅先の雑煮に幾多海もの

小西 和子

オーラ

マスクより飛び出してくる笑ひ声  
息荒きラガーのオーラ人寄せず  
除夜の鐘六腑の底に響きをり  
去年より餅少な目に今朝の椀  
書初や大志の文字のはみ出せる

黒住 康晴

寒卵

煮凝や夜の底なる鮎の黙  
寒卵一貫目の子産みし朝  
書初の爺の指南やもみぢの手  
神将のまなこ鋭し寒の月  
モジリアニの模写をする子やちゃんちゃんこ

西郷 慶子

福笹

背中への陽の温もりや福寿草  
好きな札目の前におき子の歌留多  
七種や俎板叩く父の声  
福笹や舞妓連れたる若旦那  
熱爛や過ぎし思ひ出セピア色

吉田 宏之

# 紅玉集

はなちゃんのパママはかなで真くんのママはママ  
はなちゃんのをせわで大変いそがしい

きむらかなで (二才)  
松久 奈桜 (小三)

ミルク飲み休けいしてねサンタさん  
目が覚めて来てくれたかなサンタさん  
年こしではじめて夜ふかしうれしいな  
楽しくてあつという間の三が日  
七草のおかゆを食べていいかおり

廣瀬 将也 (小六)

雪のなか静かにひびく除夜の鐘  
大晦日家族みんなで反省会  
初もうでお願いごとが多すぎる

お雑煮に何を入れるかもめている  
お年玉母銀行へ預け入れ  
年の暮雪がしんしん舞い降りる

塩路 彩奈 (中一)

友だちと長く話せる冬至来て  
正月に三キロ太りやせないと  
雪を掻く天神さまに人多く  
唐あげを詰めて欲しいよせち料理  
好物は砂糖しようゆの角の餅

廣瀬 結麻 (中三)

雪だるま暖かい日の思い出に  
おせち料理三日目にはもう慣れた味

塩路 遼 (中三)

大晦日OB戦の感にふる  
最近重詰の味口に合う  
雪の中合格祈願の手を合わす  
かしわ手を大きく打って雪とばす  
受験絵馬掛けて強気をとり返す

## 三月号月評

塩路 隆子

今月はあまり取り上げる機会が少なかった人達の良い作品を中心に、ベテランの作品を加えて焦点を当ててみる。久しぶりにわくわくしながらの筆運びとなった。

### 歳の瀬や京の真中の六角堂

田中 淺子

六角堂にある「へそ石」は、かつてここが京都の中心であったので、元は門前の六角通りに在ったものを今の位置に移したものである。「へそ石」と言われる通り京の都の中心として、また華道の要として今も賑わっている。歳 of 瀬に訪れた作者が、とこが京都の要として栄えた六角堂であると佇む姿が彷彿とする句である。

### 伊勢海老の融通きかぬ飾付け

北尾 章朗

毎月の琥珀抄の鑑賞を、創刊以来休むことなく続けて、頂いている重鎮であり、穏やかさを絵に描いたようなお人柄、軽妙な句の得意な作者である。お節料理を一段と

豪華に見せる、伊勢海老の飾付けであろう。作者がされるわけではないと思われる。奥様か、お嫁さんが伊勢海老の料理を終え、その最後の仕上げの段階、飾付けに苦心をされているのを見た作者の感想である。「融通きかぬ」の措辞を見つけたのがお手柄の作品。今年もまた、作者ならではの視点の利いた鑑賞を、健やかに続けて戴きたいと願うばかりである。

### 縹渺と近江雪原月照らす

笹井 康夫

菜の花句会の幹事を創刊以来続けて頂いている作者であり、守山にお住まいの作者である。豊かな湖をかこみ、米どころである近江に広がる近江の田園地帯を、一面に雪が覆っているのを「雪原」と捉えられ、またそれを月が照らしているさまを「縹渺」と捉えられたのがこの句の素晴らしいところ。芭蕉のいう「ほそみ」、言い替えると「幽玄な境地にたつて捉えた美」と言える。立派な句に仕上がっている。樟蹊子が存命であれば涙を流して感動する作品であろう。大切にして頂きたい。

### 皿そばや出石の街の雪も止む

難波 篤直

奥さまを亡くされてからは、よくご長男と旅をされる。「但馬の京都」と言われている出石を訪れた時の作品である。恐らく楽しみにされていたのであろう当地の名物の「皿そば」を食べておられる。さて何枚の皿をかさねたのであろうか。作者の満面の笑みが浮かぶ。気分上々であったことは下五の「雪も止む」の季語が物語っている。健康を取り戻され、最近めきめきと安定した句を作っておられる作者、今年も健やかに作句を続けて頂きたいことを願っている。

〈以下略〉

